立命館大学・神奈川大学 21 世紀 COE プログラム ジョイント・ワークショップ 「歴史災害と都市―京都・東京を中心に―」の意義

The Significance of Ritsumeikan University and Kanagawa University 21st Century COE Program Joint Workshop "Historical Disaster and Cities: Case studies of Kyoto and Tokyo"

立命館大学長　長田 豊臣
NAGATA Toyoomi(Chancellor of Ritsumeikan University)

I would like to describe the significance of the joint workshop. It is difficult to do large-scale research by only one university. For this reason, it is important to utilize a social network and to advance research. I would like to express respect to the staffs of two universities which did such a trial. I desire the following things;

· Progress of research of two universities
· Realization of the university of a world level
· Practical use to the education of the result of research

去る 2006 年 8 月 26・27 日に、横浜市西区において、神奈川大学と本学の 21 世紀 COE プログラムが共同で上記テーマに関するワークショップを開催した。11 件の発表と総合討論が行われ、広汎な研究交流とともに大きな成果があがったと聞いている。この度、その報告書が刊行されることになったので、ジョイント・ワークショップの意義について考えたことを若干述べてみたい。

本来、21 世紀 COE プログラムの導入は、国際競争力のある世界水準の大学づくりの拠点形成を目的としており、将来的には新しい研究教育組織の創出も期待されている。それを実現するための具体的な方法はいくつもあると思われるが、その大学のもつ力量を最大限に活かしきるところから始めなければならないだろう。ところが、たとえ本プログラムのような大がかりな組織でも、研究の体系化を、1 つの大学で担うにはかなり無理を強いられるし、できることには限りがある。現代求められている学問の枠組みを超えた広範囲なテーマを追求する研究では、広く社会の研究ネットワークを活用し、多様な角度から研究を推進する必要がある。そして大学は、その研究ネットワークのコアとしての役割が期待されているのである。今回、この課題の解決策として、両大学の 21 世紀 COE プログラム担当者がかかる試みをされたことは、この方向性を的確に捉えていて、両大学の担当者の慧眼に心より敬意を表すものである。

神奈川大学の 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、本

学のプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」とともに、2年度目の採択で、今年度で4年目を迎えている。この21世紀COEプログラムは5年という期限をつけられたものであるために、期間中に研究教育を遂行するだけでなく、終了後にいかに継続して取り組むことができるかが重要な課題となる。このあたりは、本来採択された大学が責任をもって保証すべきところであるが、研究が21世紀COEプログラムの期間の途中で中止に追い込まれた大学もあり、実際にはすべてがその目的を実現することができるかは難しいところであろう。

幸いなことに、本プログラム採択の後、本学では文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業の1つである学術フロンティア推進事業によって京都市の衣笠キャンパスに歴史都市防災研究センターを、同じハイテク・リサーチ・センター整備事業によって滋賀県草津市のびわこ・くさつキャンパスに防災システムリサーチセンターを立ち上げることができ、恒久的な取り組みの基礎をつくることができた。前者は工学と人文・社会科学との学際研究を、後者は工学と情報科学の共同研究に主体をおいているが、両センターは研究教育の実施やシンポジウムの開催などにおいて強い協力関係をもっている。今後は、いかに文化遺産の防災に関して、世界水準の拠点を形成するかについて弛まない努力をしなければならない。

私は、最初にこの企画を伺った時に、両大学の研究テーマが全く異なっているかのように感じ、どこにジョイント・ワークショップを実施する接点があるのか見出すことができなかった。しかし、今回のジョイント・ワークショップで扱った歴史災害に関しては共通の基盤があることを初めて理解することができた。つまり、異なった分野やテーマといえども、特定の部分に関しては共同して研究を行うことが可能なのである。今回の企画は、研究者個人の協力関係から始まったのではないかと推測している。それが、組織としての取り組みに発展し、今後さらに新しい研究の流れを形成することになれば、21世紀COEプログラムの目的の1つは達成されたことになるのではないだろうか。

今後の両プログラムの研究がさらに進展し、それが教育にも生かされていくことを強く望む。また、両大学の研究上の連携が深まり、ともに世界水準の大学づくりにかかわっていくようになることを切に願っている。